

そいまでやらなくても
いいのに物語

ねじめ正一



そいつまでやらなうと
いふ

江苏工业学院图书馆
藏书章

いのち物語

ねじめ正二

そこまでやらなくても
いいのに物語



1991年6月30日 初版発行

著者／ねじめ正一

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13 〒102 振替 東京3-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan

ISBN4-04-872634-X C0093

目次

両軍出場選手紹介 5

その一 草野球の巻 17

その二 引退試合の巻 103

その三 テレビ局占拠の巻 163

そいまでやらなくてもいいのに物語



村上敦子さんへ

両軍出場選手紹介（打撃順）

《どんまいず》

1 ライト 下山 背番号12

大柄。背は立山選手に負けず劣らず高いが脚が短い。しょっちゅう「すいません、すいません」と言うが、心から「すいません」と言っている感じではない。おかしくなくてもすぐに笑うが、目がぜんぜん笑っていない。太っているわりに俊足で、高校時代ヤクルトの投手荒木あらかきと同級生だったというのが自慢。仕事は純文学の編集者。

2 ショート 時田 背番号7

カラダは小さいが、チームメイトのなかではいちばん気が強い。壱はじめといっしょの年に入団して新人王を争う。下馬評で壱のほうが有力と言われていたのがよほど癪に障

つたらしく、ぼてぼての内野ゴロを打つても一塁に滑り込むというガッツで新人王を
 勝ち取った。もっとも、そのときの滑り込みで右手の中指を骨折し、本業のデザイナー
 ーの仕事を二週間も休んだという。

3 ファースト 益田 背番号21

三〇年来の熱狂的大洋ファン。チームメイトの時田が横浜球場に大洋の試合を観に
 行つて、チーム内ではおとなしく黙々と野球をやっているあの益田選手が一塁側スタ
 ンドで上半身ハダカになって大洋ホエールズの旗を振っている姿を見たときには、思
 わずおしっこをちびつたそうである。野球を愛することにかけては海津監督かいづといひ勝
 負で、《どんまいず》の年間六五試合すべてに出場する。詩人としてかなり有名であ
 る。

4 サード 吉川よしかわ 背番号5

バッティングがすごい。完全に草野球の範疇はんちゆうを越えている。面構えも、ケツが大き
 く発達した体型もプロ野球選手そのものである。とはいえ性格はうぶで、顔がすぐ赤
 くなる。当然ながら守備はサード。

5 ピッチャー 立山 背番号11

背が高く撫^なで肩で眉毛が薄い。「どんまいの玉三郎^{たまさぶろう}」と呼ばれる。チームの会計係。平日は某出版社の単行本編集者。気が弱く、元上司である海津監督にしじゅう怒鳴^なられている。

6 セカンド 壺 背番号33

日大二高に野球入学をしたという経歴の持ち主だが、今は太りすぎてかつての面影はない。長嶋^{ながしま}茂雄^{しげお}を神様と信じ、崇^{あが}めたてまつっている。職業は民芸品店オーナー兼詩人兼小説家。

7 レフト 東山 背番号54

チーム内では「怪物東山」と言われている。チーム創設者のひとりで、海津監督の一年先輩にあたる。監督がゆいいつ敬語を使^{しやべ}って喋^{しゃべ}る相手。温厚でけっして怒らず、チームメイトからも一目置^しかれている。

なお、「怪物東山」というのは監督の命名である。監督の学生時代、一足先に社会

人になった東山選手が、会社の帰りに監督の下宿に遊びにきたことがあったそうだ。ちようど友人が四、五人きていて、みんなで酒を呑みながら鍋をつつき、酔っ払ってそのまま雑魚寝してしまった。監督もいつのまにか眠っていたところが、明け方「ずずずー、ずずずー」と無気味な音がして目をさますと、これから一番電車で会社に行こうとする東山選手が、おツユだけ残っていた大きな鍋を両手で抱え上げ、鍋のふちに直接口をつけて「ずずずー」と汁をすすっていたという。なるほどたしかに怪物である。

8 キャッチャー 堂本 背番号 34

大きな声としぐさでチームをぐいぐい引つ張っていく《どんまいず》のキャプテン。右でも左でも打てる。思いつきスウィングするので、空振りしたときは地面に転がる。面倒見がよく、責任感が強く、試合中に怪我をするヤツが出ると必ず病院まで付いていく。職業は子供の本の編集者。

9 センター 清水 背番号 17

マザコンである。親は浜松はまつにいるが、母親が息子むすこに会いに一月に一度上京してく

る。そのときが《どんまいず》の試合にぶつかると、必ず試合を見にくる。母親が試合を見にくるなどというと、ふつうは中学生でも照れるものだが、清水選手はぜんぜん照れずに喜んでゐる。独身。掃除洗濯が得意で、嫁さんなんかぜんぜん必要なさそうである。

代打 ライト控 穴戸 背番号 35

入団三年目だが、すでに一〇年ぐらいいるみたいにチームに溶け込んでいる。腰が低く、怒った顔は一度も見せたことがない温厚な性格。チームメイトからの信頼も厚い。監督もお気に入り、来年あたりはチームの幹部になれるのではないかと。チームに入つたものの初安打がなかなか出ず、「オレには草野球の才能がないのでは」と悩んでいた。初めてヒットが出たときは、うれしくてうれしくて思わず涙を見せてしまった。職業は計器メーカーのサラリーマン。

同 ピッチャー控 丹治 背番号 16

《どんまいず》一のおつちよこちよい。なにしろこの男、入団して初めての試合に出場して、走つたあといきなり「苦しい苦しい」と胸をかきむしってひっくり返り、ピ

ツクリしたチームメイトが救急車を呼んで病院に担ぎ込んだという経歴の持ち主なのだ。結果はもちろんたいしたことはなく、たんなる運動不足であった。その後もチームにかけた迷惑は数知れず、中でもバッティング練習をしていて急に集中力を失くし、バットがすっぽ抜けて、そのバットが監督に当たりそうになったときには、さすがに海津監督も堪忍袋の緒が切れて丹治選手を怒鳴りまくったものである。

若いのでいちおうピッチャーをやっているが、マウンド上でペチャペチャわけのわからないひとり言を言うくせがあり、守っているほうはだんだん気持ちが悪くなってくる。本業はビデオ作家。

同 キャッチャー控 権田 背番号6

チームメイトから「パンダ」の愛称で親しまれている。独身で、アパートが壱の家と近く、壱が「たまには飯でも食いにこいよ」と誘っても、一度もきたことがない。失礼なのではなく、ものすごい照れ屋なのだ。益田選手の詩のファンで、益田選手といっしょに野球ができるだけで幸せだと思っている。その証拠に、入団してもう四年もたつのに、今でも益田選手としゃべるときには顔が赤くなる。

同 ショート控 菅野 かんの 背番号2

千葉の銚子 ちょうし から試合にやってくる。試合開始の四時間ぐらい前に自宅を出発する。試合が終わってもチームメイトとは酒も飲まず、急いで帰る。つまり、二時間の試合をやるのに往復八時間かかるわけである。

同 レフト控 穴戸 あなと (忠) 背番号7 (ただし少年野球チームのもの)

ライトの穴戸選手の息子。中学一年だが背丈はすでにおやじを抜いている。試合の員数が足りないと駆り出される助 すけ っ人。ひたむきに野球に取り組む姿勢と、近ごろの中学生にはめずらしい素直な性格が、なかなか可愛 かわい い。子供のいない海津監督は、どうやら忠を自分の息子代わりに愛しているようである。

監督 海津 背番号98

別名「草野球の虫」。草野球に専念したいばかりに会社をやめてしまった。つまり本業が草野球なのである。草野球のないときは詩人をやっている。

名誉顧問 長嶋茂雄

《東京オールデイズ》

1 ライト 東 ひがし 背番号 68

骨と皮ばかりに瘦せているうえに喘息持ちで、バッターボックスに立つとひとしきり咳込む。この咳で相手ピッチャーに同情心を引き起こさせ、球威を弱めようという目論みである。それがダメな場合は石頭で球を受けてデッドボールにし、出塁するというド根性の持ち主。

2 ショート 長命 ちようめい 背番号 75

日劇ダンシングチームの振付け師をしていたこともある元ダンサー。タップダンスが得意で、スパイクシューズを履くと足が自然にタップを踏んでしまう。おかげで長命が出塁したあとのグラウンドは穴だらけである。上原謙そっくりの美男でひそかに恋い慕う未亡人も多いが、本人は六年前に死んだ女房に操を立てて振り向きもしない。

3 ファースト 徳永 とくなが 背番号 69

背番号もイヤラシイが本人はもつとスケベである。それなのに、というか、それだから、というべきか、羞恥心のなくなつたばあさん連中にやたらともてる。噂によると、徳永の入っている所沢の老人ホームは今やハーレムと化したそうである。

4 サード 花屋敷 背番号91

チームの最年長。棺桶に片足をつつこんだ九一歳という年齢ながら現役で、名誉あるサードの地位を他人に譲ろうとしない。いやいや他人に譲りたくない一心が寿命を延ばしているという説もある。名誉といえば、この花屋敷は某国立大学の名誉教授である。専門は国文学。

5 ピッチャー 二階堂 背番号71

中野の由緒ある寺の住職。若いころは坊主になるのなどまっぴらだと思っていたが、二五歳を過ぎる時分から禿げ出し、これも仏の御心と悟りを開いたという。お経で鍛えた声が自慢。幼稚園をやったり、檀家を説得して墓地をロッカー形式にし、空いた土地にマンションを建てたりと、経営の才もなかなかのものである。

6 セカンド 伊佐^{いさ} 背番号72

野球をはじめたのは六八歳と遅いが、実力は《東京オールデイズ》ナンバーワン。北辰^{ほくしん}一刀流二段の腕前。竹刀^{しなたい}をバットに持ち替えての力強いバッティングは、そんなじよそこの若い者をたじたとさせる迫力がある。持病なし。現在は板橋^{いたばし}にあるマンシヨンの管理人をしている。

7 レフト 滑川^{なめかわ} 背番号70

伊佐が管理人をしているマンシヨンの四階に妻と二人で住む。《東京オールデイズ》の選手補充係。伊佐が《東京オールデイズ》に入ったのも、滑川が誘ったのである。二年前に税理士を引退したばかり。

8 キャッチャー 新城^{しんじょう} 背番号60

《東京オールデイズ》の最年少。そのせいかサードの花屋敷と仲が悪い。花屋敷のことを蔭^{かげ}で「老害」などと言うが、老人ばかりのチームではそういうことを言っても反感を買うばかりである。